

デジタルビジネス時代の経営層に贈る

これから「勝つIT」 「負けるIT」とは

近年急速に広がりつつあるビジネスのデジタル化。
これを支えるITにも、大きな変革が求められている。
従来型の固定的なITでは変化への対応が難しくなり、
十分なスピードが発揮できないと懸念されているのだ。
それではデジタルビジネス時代に勝ち残るために、ITはどうあるべきなのか。

IDC Japanでリサーチマネージャーを務める小野 陽子氏と、
日本企業のネットワーク基盤を支え続けている
NTTPCコミュニケーションズ 代表取締役社長の
田中 基夫氏が語り合った。

デジタルビジネス時代の経営層に贈る

これから「勝つIT」「負けるIT」とは

コインの裏表になったビジネスとITの関係性

— デジタルビジネスの広がりやデジタルトランスフォーメーション(DX)の進展によって、ITインフラにも変革が必要だという議論が増えています。ではこれからのITインフラには、どのようなことが求められているのでしょうか。

小野 最も重要なポイントは、変化が激しくなっているビジネス環境に、どれだけスピーディに対応できるかだと思います。デジタルビジネスの時代にはITを駆使し新たなサービスを立ち上げたり、競争力を高めるためにITで構築したビジネスプロセスを臨機応変に修正したりといったことが重要になります。必要に応じてITをスピーディに足したり、引いたりできることが求められています。

伴って、クラウドサービスやモバイルの活用も広く浸透しています。

小野 その一方で、ITのコントロール力を失う企業も増えています。特にネットワークは深刻です。モバイル活用やクラウドサービスの利用が広がったことで複雑化し、運用管理に手間がかかるようになる一方で、企業内にネットワークの運用管理ができるエンジニアがいなくなっている。特に「ひとり情シス」のようにリソースが限られた中堅・中小企業では、経営層が考える以上に疲弊し、コントロール力を失っているケースが多い。このコントロール力をいかにして取り戻すかも、重要な課題になっています。

— そのような課題が顕在化の中で、最近ではどのようなアプローチが注目されているのでしょうか。

小野 私が注目しているのは、ネットワークのクラウド化、つまりネットワークの仮想化です。特に拠点間を結ぶWANの仮想化(SD-WAN)は経営層も注目すべきキーワードです。これは物理的なネットワークの上に、仮想的な論理ネットワークを構築するもの。これによって1つの物理ネットワークの上に複数の論理ネットワークを構成したり、複数の物理ネットワークを1つの論理ネットワークとして使う、といったことが可能になります。

田中 ITシステムを支えるインフラは、大きく分けると「サーバー」「ストレージ」「ネットワーク」で成り立っていますが、このうちサーバーとストレージはいち早く仮想化が進み、柔軟性とスピードが飛躍的に高まりました。ハードウェアの物理的な制約を意識せず、簡単な設定だけで利用できるようになったのです。しかしネットワークでは仮想化が遅れており、多くの企業ネットワークは旧態依然としたままです。そのため接続拠点の追加や、通信帯域の増強を行う場合には、新たな機器の追加や膨大な設定変更、その動作確認などを行う必要があり、1つの変更数週間以上かかることも珍しくありません。例えば、新しい拠点を追加したり、通信を増速したりするのに、いまだに数カ月以上かかるケースでは、ネットワークが原因になっていることが少なくない。こんなことではビジネス以前に負けてしまう。この問題を解決できるのがネットワークのクラウド化であり、WANの仮想化(SD-WAN)なのです。

— 拠点の追加や通信の増減などにも、まるでクラウドサービスを利用しているかのように、簡単に対応できるようになるわけですね。

小野 SD-WANの活用は、日本より米国のほうが進んでいます。米国企業はネットワークこそデジタルビジネスの根幹であるとの認識が高く、SD-WANによってWANのコントロール力を強化しようという意識が高い。新しいサービスを立ち上げるのに数カ月以上かかる企業と、1週間で始められる企業では、圧倒的に後者のほうが有利なのは言うまでもありません。日本でもグローバルな経験を持つ企業ほど、スピードを重視する意識が強いようです。



株式会社NTTPCコミュニケーションズ
代表取締役
社長

田中 基夫氏

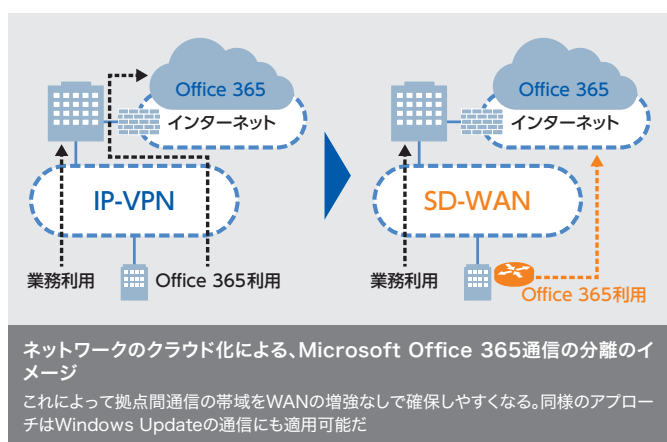
田中 私も同意見です。デジタルビジネスの世界では、ビジネスとITはコインの裏表の関係にあります。ビジネスにスピードが求められるようになれば、ITにもスピードが必要になります。ここ数年でビジネスのスピードはさらに加速しています。ある画期的なビジネスモデルを構築した企業が、あっという間に覇権を握り、それ以外の企業がそこから追従しようとするのが難しくなっています。

業務においても一層のスピードと柔軟性が求められています。例えば、働き方改革もその1つ。これまでのように場所・時間に制約された席で働くのではなく、外出先や出張先はもちろん、従業員の自宅なども含め、場所を選ばずに仕事ができる環境が広がりつつあります。それに

ネットワークのクラウド化による経営・業務メリットとは？

—— ネットワークのクラウド化によって、具体的にどのようなことが可能になりますか。

小野 現時点で多いSD-WANのユースケースは、クラウドサービス利用に当たって、企業拠点とクラウド間のトラフィックと従来の拠点間トラフィックを分離するという利用方法です。一例を挙げましょう。最近ではMicrosoft Office 365のようなクラウドサービスを導入する企業が増えています。これによって膨大な量の通信が発生するようになり、拠点間通信を圧迫するケースが多くなっています。このような場合には、拠点間通信とOffice 365への通信を論理的に分離し、Office 365への通信を各拠点から直接インターネットに流すようにすれば、拠点間通信もOffice 365通信も快適に利用できます。



またWindows 10への移行でも同様の問題が起きています。アップデートが頻繁に発生することで、通信が圧迫されているのです。このような場合には、Windows Updateへの通信を分離すると効果的です。

—— 同様の問題はすべての企業で発生する可能性がありますね。

小野 そのとおりです。もちろん物理的な通信を増強するというアプローチもありますが、その場合にはWANの通信コストが跳ね上がります。クラウドサービスに出ていく経路を論理的に分離し、WANではなくインターネットに流すことができれば、そのコストを抑えられるわけです。

田中 M&Aによる企業統合を行う場合も、ネットワークをクラウド化することで、ネットワーク統合が容易になります。既存の物理ネットワークをそのまま生かし、その上に論理的なネットワークを載せるだけでいいからです。

小野 セキュリティも強化しやすくなります。例えば全社ネットワークは物理的に1つのネットワークにしておきながら、開発部門と営業部門で論理的なネットワークを分けるということが可能です。企業グループ全体のネットワークを構築する場合にも、あらかじめネットワークをクラウド化しておけば、グループ会社の再編も容易になるでしょう。

—— ネットワークの柔軟性が高まることは理解できましたが、その管理や設定作業の負担は増大しませんか。

田中 その心配はありません。ネットワークのクラウド化には、他に2つ

の注目すべき特長があるからです。それは「可視化」と「ソフトウェアによるコントロール」が容易なこと。物理的なネットワークでは、どのアプリケーションの通信量がどれだけあるのかといったことはなかなかわかりませんが、論理的なネットワークではこれが簡単に、見える化できます。だからこそ、どのアプリケーションのトラフィックをどのルートで流すべきかの判断が容易になり、Office 365やWindows Updateへの通信を分離する、といったことも可能になるわけです。さらに通信を見える化できればシャドーITへの対応も容易になります。

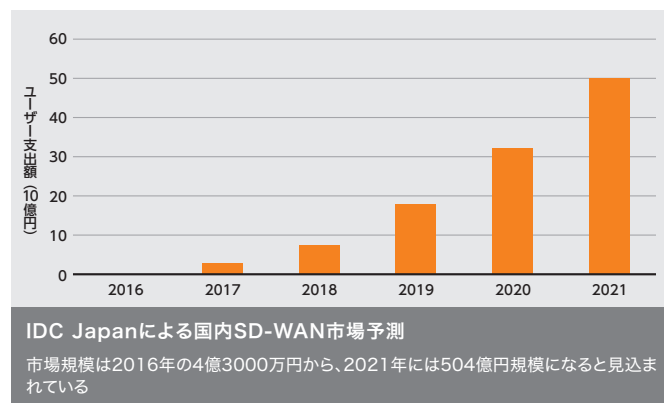
—— 運用管理上にも様々なメリットがあるんですね。

田中 API (ソフトウェアから設定や機能を制御するためのインタフェース) も用意されており、設定変更作業をソフトウェアで自動化・簡素化することも可能です。そのため、ネットワーク管理のための人材を確保できない企業でも、簡単に利用できるのです。実際に企業からの期待も大きく、当社が行ったアンケート調査では約半数の企業が「大きなメリットがある」と回答しています。



IDC Japan株式会社
コミュニケーションズ
リサーチマネージャー

小野 陽子氏



国内市場へのビジネスインパクトを高める通信事業者発のサービス

— これから急拡大する領域だというわけですね。日本企業が導入する上で、配慮すべきポイントなどはありますか。

小野 もともとSD-WANは、米国のユーザーグループが提案したものです。米国では、国際ネットワークを含め、安価なインターネットを活用していこうという意識が強いです。一方、日本は、光回線を活用した広帯域で安価な閉域網（インターネットを経由しないネットワーク）が多く提供されており、セキュリティの観点からも閉域網が好まれる傾向にあります。そのため米国発の製品やソリューションをそのまま導入すると、日本市場のニーズに合わないことも少なくないのです。

田中 日本企業の多くは、NTT東日本・NTT西日本が提供している「フレッツ」をアクセス回線にし、NTTグループの閉域網で拠点間を接続しています。実際にこのようなお客様からは、「フレッツ」と閉域網を使いながらネットワークをクラウド化できないかといったご相談も多く頂戴しております。NTTPCコミュニケーションズは、NTTコミュニケーションズグループの一員として、SDx+Mを実現するサービスの一環として既に2017年1月、WANを仮想化する「クラウド型ネットワークサービス」の提供を開始していますが、閉域網で高いセキュリティを確保したいというお客様向けに、今年7月に「セキュアパッケージサービス」を追加します。

小野 このサービスの重要なポイントは、通信事業者が提供しているということです。高い信頼性とセキュリティの実現は、日本企業にとって避けて通れない重要な要件です。日本ではWANの仮想化が米国に比べて遅れていましたが、このような「通信事業者発」のソリューションが登場することで、この状況が大きく変わる可能性があるかと評価しています。国内通信事業者は日本企業のWANに対するニーズをよく知っており、企業ネットワークの運用をエンドトゥエンドで支えられる存在でもあるからです。

田中 ありがとうございます。私どもはエンドトゥエンドでの支援に加え、パートナーとのエコシステム構築にも注力していきたいと考えています。ネットワークのクラウド化の本質は柔軟性と俊敏性にありますが、それを支える根幹はAPIです。これをパートナーにも公開していくことで、様々なシステムやサービスがAPIを通じて連携し、業務の簡素化や自動化を実現できるようになる。近い将来には、AIがネットワークを管理したり、AIやロボット、IoT機器などが有機的につながる、RPA（ロボティック・プロセス・オートメーション）が進化したようなビジネス環境も生まれるかもしれません。機械が自動的に行えることは機械に任せればいい。これによって人間は、より価値の高いビジネスに注力できるようになります。

— 期待が膨らみますね。

田中 そうですね。パソコン、インターネット、スマートフォンにクラウドサービスなど、経営や業務に欠かせないITはこれまでも多く登場してきました。それをいち早く使いこなし、自社のビジネスに組み込んだ企業が、その後大きく成長を遂げています。それと同様に、この1、2年でクラウド化されたネットワークを使いこなすことが、今後のビジネスの大きなカギとなる気がしています。

小野 私もこれが広く使われるようになるのは時間の問題だと思います。ITのクラウド化は、企業のデジタル戦略と密接にかかわっています。ネットワークを含めたクラウド化の動向を注視しつつ、ITを意識的かつ戦略的に見直していくことは、日本企業が今後も高い競争力を発揮する上で、欠かせない取り組みになるはずです。



お問い合わせ

株式会社NTTPCコミュニケーションズ

TEL:0570-033-081

受付時間 9:30-12:00 13:00-17:30(土日祝日・年末年始を除く)

URL:<https://www.nttpc.co.jp/contact/>

サービスに関するご相談・お問い合わせはこちら

